

# パネルディスカッション

パネリスト

司 会

宮 台 真 司  
河 崎 俊 宏  
大 西 英 充  
高 佐 宣 長

司会 それでは、定刻になりましたので、パネルディスカッションを始めたいと存じます。

先ず、パネリストをご紹介します。

宮台先生には、基調講演に引き続き、パネリストとしてお残りをいただきました。

もうおひとかた、宮台先生のお隣は、河崎俊宏上人でございます。先ほどの、所長からの開会のご挨拶の中でも言及が御座いましたが、ただいま全国日青の会長をお務めでございます。石川県輪島市妙相寺の御住職でございます。昭和四十三年のお生まれです。いわゆる行動する青年僧侶の代表として、パネリストにお迎えを致しました。現在、宗門の、人権推進委員会の委員ですとか、或いは伝道企画会議の委員などもお務めの方でございます。

もうおひとかた、大西英充上人でございます。いわゆる在家ご出身の方でございます。昭和三十九年のお生まれで、現在は、東京教学や神道学を学ばれたという、異色の経歴の持ち主の方でございます。昭和三十九年のお生まれで、現在は、東京新宿の常圓寺さんに山務されておられます。現代宗教研究所の研究員をお務め頂いています。宮台先生の講演会等を、度々聴講をされて来られたようでして、かなり以前から宮台先生との知遇を得られているそうです。そうした御

縁で、大西上人のご紹介に依りまして、昨年十一月の、現宗研でのミニ講演（「宗教者が平和運動を行う意味―グローバル化と善悪の不透明化―」（本誌四二四頁））ですとか、本日の基調講演などの機会を得た、ということでございます。

以上で、パネリストのご紹介ということにさせていただきます。パネルディスカッションに移らせていただきます。（拍手）

さて、宮台先生の、午前中のご講義は、恐らく昨年現宗研内でご講演をいただいた内容となるべく重複しないようにされようというような意図がございましたのだと思いますけれども、その分、ベーシックな部分の議論を割愛されておられるところがありになって、各論的にお話しになられたので、或いは、少し理解をしにくい方も、――先ほどエヴァンゲリオンのことなどを講師紹介の中で申し上げてはしまったんですが、実は、私もエヴァンゲリオンにつきましては、名前ぐらいしか知らないものでございまして、正直に申し上げますと、そういう部分で、よく理解ができませんところもございました。しかし、今回のテーマである「宗教者と社会の関わり」ということを考えていく上で、幾つか大変示唆に富むご提言をいただいたのではないかと思います。

先ほど、昼食休憩をされているところへお邪魔を致しましたらば、日蓮宗においては異端審問というようなことはあるのか、といったご質問を賜りまして、ではその辺りのところから、午後のパネルディスカッションの議論を始めましょうかというようにお話を申し上げました。その場には、パネリストの大西上人も同席されておられたのですが、大西上人は、宗門にも異端審問的なものがあったても可いのではないかと、というお立場のようです。そこで、その辺のところを切り口にして、大西上人にまず口火を切っていただければと思います。

大西 はい。大西でございます。まあ異端審問という言葉がちよっときつく聞こえるかもしれませんが、やはり宗教である以上、一線を画すと申しますか、異端審問云々からは離れるかも知れませんが、最近の風潮、日蓮宗に限

らず、日本の宗教界、或いは社会全般で、オウム事件の時の、様々なコメンテーターのお話を聞いていても、つくづく思ったんですが、宗教といわゆる道徳とをこっちゃんにしている人が余りにも多いのではないか。私の考えとしましては、やはり宗教的な価値観と世俗一般的な価値観というのは異なって当たり前であって、ただそのギャップが歴史的に様々な不幸を生んできたということはあるんですが、それでも、私はその宗教的な価値観と世俗一般的な価値観とというのは異なって当たり前だし、むしろ異なるべきであるという考えを持っております。今、社会的に、そのお坊さんに対して、悪口は多く聞かれる、悪口言うと言白いからとウケ狙って言っているような向きも非常に多いし、私も自虐的にそういうことを言ったり、冗談で言ったりすることもあるんですけども、やはりそれも、そういう宗教と道徳というものを混同しているところから出てきているようにも思えるんですね。それに対して、お坊さん或いは宗教者の立場から、明確な反論、或いは批判、批判に対する批判というものが、きちんとなされていないのも、他ならぬお坊さん自身が、そこら辺をちゃんと分かっているからではないだろうか。それが今日蓮宗を始めとする、特に伝統仏教宗派の置かれた、一種の何て言いますか、停滞、まあ葬式仏教などと言われて久しいんですが、最近の風潮を見ますと、散骨なども一般に行われるようになって、もはや葬式仏教ですらないと、では今後どうなっていくんであろうかと、正直、自分の行く末も含めて、心配しているところです。

司会 今の大西上人の御意見は、先ほどの宮台先生の、社会の視座から否定されることでも宗教的な視座からは肯定されることがあり得る、という発言に繋がることなのだと思います。

日蓮聖人がそうした考え方をされていたかどうか、というような直截な問い方をするのも、この場合は如何かとは思いますが、例えば「法華を識る者は世法を得べきか」というような観点・思想も、日蓮聖人はお持ちであったわけですよ。今の大西上人のご発言についても結構ですし、先ほどの宮台先生の基調講演についても結構ですが、河崎上人、如何でしょうか？

河崎 はい。社会的価値観と宗教者の価値観、という中では、やはり大西上人のお話もあったように、そこに关しては私も同感のように思います。お祖師様も社会の世相を見ながら、宗教者たる日蓮が、どのような社会性を示しているのか、というところで世俗的な社会的価値観に迎合するだけじゃなく、むしろそこに宗教的価値観を出されていったのではないかと思います。

司会 今の、御二人のご発言を聞いて、宮台先生いかがですか？

宮台 昼食時に大西さんと雑談をさせていただいた話題なんですけど、徳川の統治戦略は凄い高度なものだと思うんです。日本だけじゃないんですが、現代社会における道徳や社会の決まり事に対するある種一枚岩的な、単細胞的な発想を戒めるのにちょうどいい参照点ではないかと思えます。江戸時代の統治戦略の非常に分かりやすい典型事例は、性や芝居のような、いわば社会と両立しないものについては、形的には否定をしますが、壊滅させずに人形町に移動させる、吉原に移動させるという風に一つの場所に集中させて、その上で管理をしたんです。建前と本音の使い分けと言ってもいいんですが、その社会的なあるべきことについての建前と、しかしその建前において否定されることを消してしまうと、実は建前によって維持される社会さえも保たないという感覚の両立が、宗教者にとって非常に参考になると思います。例えば、社会は宗教よりも小さく、宗教は社会よりも大きい、或いは大きくあるべきだと言いますが、実際にその教団や教会が社会の中に生き延びている場合、多くは社会が建前において否定したことを排除しないで包摂的に扱う。ヤクザのコミュニケーションの中にありますが、ガチンコで喋る奴がいて、その横にこいつはこう言つとるけど本音はこういうことや、というようなある種収まりどころを示唆しながら交渉を進めていくことに近いような役割を宗教、或いは教団が果たしてくることによって生き延びる。もう一度言うけど、確かに社会よりも大きいのが宗教だけでも、完全に社会を否定するような在り方をする宗教は実際生き延びることはできず、実際には社会が建前においては排泄、或いは排斥したものを包摂して社会に投げ返す、という形で社会を補完す

るような役割を、通常においては宗教は果たしていると考えられます。例えば、犯罪を犯して社会において裁かれて、俺はもう社会に居所がないと思った人間を教団が受け止めることによって、それこそ道徳的なゲームの外側に出してしまうのを抑止する、というようなことなどが典型例だと思います。しかし残念ながら、単純に埋没した状態を続けると、教団は社会の補完物そのものに怠落をしていくと思います。要は、そのように補完して社会を支えている、その当の社会が継続に値するのかどうかという反省を欠いてしまえば、それはある種の宗教的な絶対性から遠い振る舞いに近くなってしまおうと思います。典型的な分かりやすい例を一つ言うと、どの社会でも弱者はいるわけです。今日これだけ流動性が高くなってグローバル化が進むと、その弱者を助けることがいいのか悪いのかについては、一概には言えなくなってくる。地球規模で見た場合に、この国での弱者を補完することが、より多くの弱者を生み出すことに結びつく可能性もあるわけです。或いは、この社会における弱者を補完することによって、弱者を生み出すメカニズムそのものがサポートされてしまう可能性もあります。そうしたことに鈍感であるのはまずいと思います。

司会 河崎上人は、宗教者は常に弱者の視点・視座に立つべきだという主張を、日頃からされているように承っておりますが、今の宮台先生のお話を、どういう風に受け取られますか？

河崎 今、先生のお話を聞いておりまして、弱者全てを救うことが、正しいとは言えないというところに食いつくかなど思っていたんですけども、ちょうど振っていたいてありがたいとございます。私は現実問題として、私達宗門、そして僧侶、宗教者が社会との関わりをもっていく時には、やはり、社会的弱者と言われる方々に近い立場で、なるべくその方々の思いを受け止めて、共に行動していく、共に感じ取っていくスタンスが無いといけないと思っておりますね。日蓮聖人も『諫曉八幡抄』という御文章の中に、「一切衆生の同一の苦は、悉く是日蓮一人の苦なり」という同苦の思いということを言われておるんですが、まさしく、私達はそのスタンスに立って、社会との関わりをもつ

て行動していくというのが、現実をみつめた上での本音の部分なんですけども。

司会 大西上人は今の河崎上人の考え方についてどう思われますか？

大西 はい。日蓮宗の教義はあくまでも法華經に基づくものでして、この法華經というのは皆さんご存知のように、釈尊の言葉として書かれているわけですが、私が一番印象に残っている一節、自我偈の中の「我もろもろの衆生を見れば苦海に没在せり」と、苦しみの海に取って没する、これは釈尊ご自身が、それこそ今で言う社会的弱者と共にその苦しみの中を生きていこうという宣言文として、私は読んでるんですけれども、河崎上人始め、日蓮宗はもとより、その他の宗教の人達の中にも、いわゆる社会的弱者のために尽くそう、或いは尽くしている方々、たくさんいらっしゃることは私も存じ上げておりますし、それを一概に否定はしないんですけれども、今日の近代社会の成熟期にあたって、そもそもどういう立場の人を弱者と認めるのか。卑近な例で言いますと、部落差別の問題、これ行政的には今部落というのは非常に、優遇というとまた突っ込みが入るかも知れませんが、戦前の全国水平社から引き続き運動によって、相当な成果を勝ち取ってきた面はあるんですね。ただ、今それが逆差別じゃないか、という風な声も上がっている事実もあるわけです。つまり部落だからといって優遇されてるんじゃないか。昨年ですか、奈良県のある職員が、空出張とかなんとかということが問題になりましたけれども、その職員などは、その地元の部落解放同盟の役員でもあったわけですね。そこから部落解放運動の、いわば闇の部分というものが指摘されつつあるわけですが、あえて誤解を招くことを覚悟で申し上げますと、いわばその弱者であることを、逆手にとって強い態度に出るというむきもあるんです。そういう現実を思えば、弱者だから、という姿勢が果たしてどこまで許されるんであろうか。今現在、私達が生きている時代がそもそも、どういう時代で、どういう社会で、その社会がどのように、構造、作られているのかと、どのように設計されているのかと、そしてその設計が誰の、どのような意図に基づくものなのか、果たしてそれをもって社会の総意としていいのか、そういう視点まで掘り下げた上で、布教活動なり、ボランティア活

動なりに、具体的な活動に取り組んでゆく前提を作る必要があるんじゃないか、そんな風に私は考えております。

司会 宮台先生も弱者の立場に立つことを否定されているのでは多分ないだろうと思います。ただし、安易に弱者の立場に立ったつもりでいると、却って弱者を生み出すメカニズムを補完してしまうことがあり得るといふご指摘だったと思うのですが、そして、宗教の……

宮台 いつもそのように体制側によって利用されてきたんですよ。

司会 誰が弱者なのかということを決めるのかという問題は、何が正しいのかということを決めるのかという問題にも直結してくるのだろうと思うのですけれども、弱者を保護しようとする行動なり姿勢なりというようなものが、却って弱者を生み出すシステムを補完してしまうということについて、もう少し具体的にお示しただけではないでしょうか？

宮台 この問題は一見難しい問題に見えますけれども、原理的にはすごく単純なことなんです。というのは、絶対の弱者が存在しないということなんです。これは、政治学の最前線では随分前から常識化していることです。或いは、哲学の最前線でも同じことです。それは人間が分別の動物であることと関係します。これが人間でこれが人間ではない、同じ人間である以上、同じに扱え、という場合には、人間でないものが排除されてしまうわけです。そうすると、別の視座に立つ人間は、いや人間でないといっても人間同様に知的であり感情的であるような存在を排除するのは許せないという立場で、鯨なら鯨の保護を主張する立場が有り得るわけです。知的な存在、知的で感情的な存在は同じに扱えということになると、知的でない存在をその外に排除していいのか、という新しい問題が出てくるわけです。これは勿論、仏教でもキリスト教でも、或いはユダヤ教でも気が付かれています問題で、知恵の実を食べるといふ旧約聖書のメタファーのものと意味は、この分別です。人が相対的な存在に過ぎないくせに、1と0を分けて、0は駄目で1はいいと選択するようになることは、何で原罪、プロトな罪なのかというと、我々は誰もが逃れられないか

らですよ。だから、どんな弱者救済活動についても、それが本当の弱者か、真の弱者を覆い隠す隠蔽行為に過ぎないではないかという批判が、例外なく、これが重要なんです。例外なく妥当するんです。例外なく妥当する以上、そうした指摘に従って弱者救済を止めるのであれば、そもそも弱者救済という観念は始めから虚構、或いは虚妄であるが故に、一切、顧みてはならないものだという話になるわけです。しかしこのラディカルな立場は、明らかに我々の人倫、感情に反する振る舞いです。ここが政治学的にも社会学的にも、今日非常に重要なポイントだと考えられていることです。もう一度言いますけれども、弱者救済は、ラディカルには全て虚妄です。しかし、ラディカルには全て虚妄であったとしても、我々は社会を既に生きている以上、現に何かを排斥して、何かを食って、何かを殺して生きていくわけですから、そのことを逃れて生きている存在はいない以上、弱者救済を全て虚妄だと断じる存在がそこに居るということも虚妄なんです。そうしたことを呑み込んだ上で、包摂的で、なおかつ再帰的反省的で、絶えず境界線を引き直すような、そういう弱者救済の活動を徹底してやるべきなんだと思います。

司会 その場合に、弱者が誰であるか、ということは我々が決めて、我々が行動して、いいんでしょうかね？

宮台 それは我々が決めるのではなくて、何か絶対者、超越者に預けるのだと言っても、私の視座からすると、絶対者、或いは超越者を立てるのもまた人為ですから、一見すると迂回路を通っているようではありながら、相対を絶対視しているだけなんです。そういう意味で言えば、最終的には私達が人為で決めて乗り越えていくしかないし、現に何かを食って生きている、ということの意味はそういうことですよ。殺してもいいもの、殺されてはいけないものを分別、それも恣意的に分けて、私達の生存が与えられているという状況がある以上、或いはそうした現状から目を背けないと決意する以上、逆にそれを人が決めるといって振る舞いからは逃れることができないんだと思います。

司会 どうですか？ 河崎上人。

河崎 はい、先生のお話を聞いておまして、社会的に見る救済と宗教的な救済、その二つの救済には、私達の思

い描いている部分の救済と、社会学的にいう救済というものは、何か少し差があるのかと感じております。そこで社会学的救済という部分で、もう少し教えていただきたいと思えます。

宮台 一般には違いがあると言われていて、その違いの大きなところは宗教者が超越や絶対を認めるのに対して、社会学者、社会科学者は認めない、ということですよ。簡単に言えば、聖なるものもまた世俗の一部に過ぎぬ、或いは超越なるものに指向する営みも人為の一つに過ぎぬ、と記述するのが社会学者だと言われています。僕自身はどう思うのかというと、全くその通りで、その区別を受け入れて構わないんですけれども、そういう風に社会学的に振る舞っている社会学者が世俗的であるのか、或いは、その世俗を超える価値にコミットすることを標榜する宗教者が真に宗教的なのかと言えば、それもやっぱり違う気がするんですね。先ほどの基調講演の時に申し上げたのもそのことで、僕が宗教者に期待をするのは、私のような社会学者ごときの言うようなことも全て踏まえた上で、単純な宗教者であれば意気消沈してしまうだけのことかも知れませんが、ステージが高い宗教者であれば、それによつてますます勇気づけられる、ますます使命を自覚して動く存在なんだと思います。逆に言えば、本来宗教的な存在が何かの契機や縁で社会科学や社会学のような世俗の営みにコミットする場合であっても、安易に科学で証明、或いは説明できないものがあるなどというのではなく、物事を徹底して世俗の内側で突き詰めて議論をすればするほど、それが世俗の人間にも賢明な宗教者にも役立つようになるかと考えられます。その意味で言えば、安易な言い方になりますが、河崎さんの仰った、宗教的な存在と世俗的な存在は補完的であり得る、或いは相互包摂的、ウロボロスの蛇のようにお互いに飲み込み合うような存在であり得るんだと思います。

司会 大西上人、如何ですか？

大西 そうですね、卑近な例を出させていただきますと、例えばこれも宮台先生の著書で私読んだんですけども、テレクラ規制条例を最初に作ったのは岐阜県、愛知県でしたっけ？（岐阜県です）岐阜県ですか（笑）。岐阜県は非常に

先進的というか、そういう条例を作ったんですが、実は、岐阜県庁の職員の間で、テレクラ同好会というものがあった、岐阜県庁の職員がテレクラ大好きだった、そういう職員が県庁の中に多数おって、そういう同好会まで作って、そういう岐阜県が全国に先駆けてテレクラ規制条例を作った、という話が非常に、私は印象に残っているんですけども、例えば、今、東京の歌舞伎町を始めとして全国の風俗街とか歓楽街とかに対して行政が、いわゆる浄化するという名目で、かなりメスを入れてるんですね。それに対して、まあ、別に私はここで、その歓楽街、風俗街のお得意さんは、お坊さんではないかということを書いてはありませんが（笑）、もしですね、行政や、例えば地元の商店街の人達などからでもいいです、そうした環境の浄化をしたいんで、お寺さんにも協力して貰いたい、というような依頼が来た時に私達はどう振る舞えばいいのかということですね。この中には中学校などで生徒を対象に法話をしているような活動をされている方もいらっしゃるでしょうし、そもそも宗教系の学校、日蓮宗の場合でしたら、立正中学校高校や身延山高校で、教育活動を宗教家の立場で行っているわけですね。ですので、風俗とか歓楽、それあっていいじゃない、俺だつて行きたいよみたいなことはおおっぴらには言いにくいですよ。しかしながら、こういう例もあるんですよ、これも宮台先生にお任せしたほうが分かりやすく説明していただけるかも知れませんが、例えば歌舞伎町の場合で言えば、いわゆる店舗型風俗というのは減ったんですけども、その一方で、デリヘルみたいな出張型風俗が増えて、その結果、却って風俗と暴力団との関係が見えにくくなったとか、或いはエイズなどの性感染症が実は増えているようだ、というような指摘もなされています。或いは経済的にも、私が聞いた話では、これは埼玉県の西川口ですか、これも埼玉県の一大歓楽街だったんですけど、埼玉県の上田知事が石原都知事の真似をしたのかどうか分かりませんが、やはり浄化作戦を行った結果、確かに環境は良くなったけれども、町の活気が失われて、そういう風俗とか歓楽目当てで来る人達を対象にした商売というのが一切成り立たなくなると、その結果、廃業に追い込まれて音を上げている人達も少なくないと、というような話も聞いております。そうになると、弱者強者の問題もさ

ることながら、善悪の問題も、果たして何が善で何が悪であるか、ということが分かんなくなってくるんですね。で、現実に皆さん、ご自身の問題として引きつけていただきたいんです、さつき私、例を出しましたけれども、そういう環境浄化みたいなことをしたいんでお寺さんにも是非協力してもらいたいというような要請が皆さんの元に来たら、皆さんはどうお振る舞いになるか。そういうようなことを私、考えております。

宮台 社会学者の観点から言えば、道徳的な善悪は単なる俗情で、俗情では社会は回らないんです。そんなの昔から当たり前のことです。例えば、今から十七、八年前に暴力団新法が議論になった時、これに僕は疑義を呈しました。その僕の疑義は今現実化して、拳銃による市民殺害事件が増えました。これは、十七、八年前に完全に予想されていたことです。その理由は敢えて説明しなくても分かるかも知れませんが、日本には拳銃が三十万丁以上あります。そのうち、アンダーグラウンドなものが五、六万丁あります。アンダーグラウンドな拳銃も、実は管理されていたわけです。管理をしていたのは暴力団の組織力です。当たり前ですが、暴力団の組織性を壊滅させれば、従来、包摂されていた三下やチンピラが吐き出されてしまいますので、彼らが持っている銃の管理ができなくなり銃による市民殺害が増えるだろう、という誰でも予想できる通りになりました。店舗風俗の規制の結果起こったことは大西さんの仰ったようなことで、これも僕が十数年前から申し上げてきた通りのことです。これは歴史を知ることの重要性なんですけども、沖縄で何故に米軍相手の売春が広がったのかというと、皮肉なことですけれども、この歴史を知らない人は沖縄にも多いので申し上げておきます。アメリカはプロテスタント原理主義の強い国だったので、西洋の他の軍であれば、占領すれば必ずそこに慰安所を作るんです。アメリカは沖縄を占領した時に慰安所を作らなかつたんです。その結果、米兵による強姦事件がものすごい勢いで増えて手がつけられなくなつたので、当時の琉球政府の人間達が、慰安所を作れと、慰安所を作れないんだつたら、特別飲食店街といって、日本の青線に相当するような所を作らせてくれということで、米軍が慰安所を作らなかつた尻ぬぐいとして、沖縄の琉球政府が特別飲食店街を作つて、それに

よって性犯罪を減らしてきたという歴史があります。勿論これは買売春なんですから、その買売春においても皮肉なことに、アメリカは制度的には買売春を否定しましたので、管理売春は完全に禁止された結果、その特別飲食店街での買売春も個人の意志で勝手にやっつてることだとされてしまったせいで、今のデリヘル現象と同じなんですが、米兵との交渉の現場で殺される、或いは暴行される女性がたくさんいたわけです。しかし、残念ながら米軍も琉球政府も一切責任を取らないで済んだという、低コスト化戦略が遂行されたわけです。道徳的な素朴な善悪は単なる俗情ですから、実際にその社会がうまく回って、被害者ができるだけ少なくなるという観点から社会を設計する場合には、基本的にはまず慰安所を作り、或いは慰安所を作らないなら管理売春を国が認めて介入できるような、公的に許容された場所に米兵と沖縄の女性達との交渉事を設けさせるべきだったんです。これは米軍のプロテスタンティズムから見ても反道徳的ですし、戦後的な感覚から言っても、明らかに市民的な俗情には反しています。しかし、こうした問題について、宗教者が関わる場合には、例えば、死んだり、半身不随になるような人間が大量に生み出されている状態で、素朴に俗情的同情にコミットすることが許される筈もない、ということをお大西さんは仰っているんだと思います。しかしこの時に、サルベージの個人性と全体性という二項対立が出てくる。そうしないと社会の全体が回らないなんてことは俺は知らない、俺は、或いは俺の家族がそうした恥ある生き方に手を染めること自体が、俺という存在、或いは俺達の家族という存在に対する否定になるんだという言い方をする人間達をどうするのか。彼らを単なる馬鹿だとしてほっといいいわけもないですよ。だから、その辺に両方足を掛けながら、道徳的な感情にそれなりに配慮しながら、しかし、全体において道徳的な俗情を守るが故に大量の犠牲者が出るような、身勝手な振り舞いが暗黙に肯定されるようなことがないようにしなければなりません。おかしな話で、宗教的、或いは科学的に引いた立場から言う、道徳的な善悪の感情に素朴にコミットすることは単なるエゴイズム以上のものではない可能性があるわけです。しかし、それをエゴイズムだと否定していいのかと言えば、否定したら我々はやはり日常を生きていけないとい

うことがあるので、そこをどう逆説的な形で折り合いをつけていくのか、折り合いがつかないものを両立させていくのかを考えるのは、社会科学者の使命であるけれども、宗教者の使命でもあろうかと思えます。

司会 河崎上人、どうですか？ 異論がありそうな顔つき（笑）に見えたんですけど……。

河崎 大西さんいいですか。（はい）多分、今日ここにお集まりの方々、今そういう、歓楽街とか、そういうことの社会性の浄化、という話を聞きに来ているのではないと思うのです。

社会に対しては、二つのポイントがあると思うのです。それは、閉じると開くだと思うんですね。閉じるというのは、寺、教師が社会に対して閉じていた、門であれ、全て閉じておった。内なる檀家のみに若干の関わりを、社会との関わりと名付けてやっておった。その状態ではいかんということを、皆さんが議論し始めて、長年いろんな意味で研鑽を積んでおられると思うのですが、そういう中で、やはり開かなきゃならん、開くということが大きなポイントになるのかと私は思っております。その開くはどこに向かって開くのか、それは社会であり地域であり、そういう中に開かれた寺院・教師であるべきだと思うのです。宮台先生のお話を客観的に捉えながら、社会的なものも研鑽に入れながら、開くということをテーマに研鑽をもっともって行っていきたいと思うんですが、その辺の、具体的な、我々の関わる問題としては、どういう風にお考えなのかと、逆にこちらからお聞きしたいのですが？

司会 お寺を社会に開く際の、その開き方ですね。河崎上人はどう開こうと思ってるんでしょうか？或いは自分はこう開いてるぞ、というのがおありになれば。それを仰っていたらいいと思うんですが、大西上人もコメントしやすいでしょから。

河崎 はい私は、いろんな意味で、ハード面、ソフト面で、社会と地域に対してやはり開くということをキーポイントとして行動をしてきております。例えば、ビハーラ活動だとか、地域に開かれたお寺作りということで、少し個人的な話になりますけれども、長年、住職がいなかった寺に私が住職させていただいて、建物ももうボロボロな、地域に

はお化け屋敷と言われたお寺に入りました。地域の人達に、白い目で見られるというような経験をしました。何かしにゃ駄目だなんて、その市民権を得なきゃ駄目だということから、開かれたお寺作りに、取りかかりました。お寺をオープンに、地域社会に溶け込みながらお寺が地域の集会的な役割として路用していただくどんどん使っただけのです。あとは信行会というものの組織作り。平成十九の三月に、能登半島地震がありまして、地震の際も、檀信徒の被災状況と地域住民の状況とケア、情報収集に日常のコミニティが必要であると実感しました。こうした事例はほんの一部ですが、要は社会に、目をしっかりと向けているか問われているのだと思うのです。大西上人はどうですか。

大西　そういう風に振られると、私も余り人のことは言えない立場ではありませんが、ただ今河崎上人のお話にもありましたように、私も今のお寺の在り方を批判する時に、閉鎖的という表現を使うんですが、実際に即して言えば、お寺は必ずしも閉ざされてないんですね。例えば私も学生時代、京都におりましたんでよく京都のお寺巡りをしましたし、先月、ちよつと所用で京都に行き、時間がありましたので、東福寺というお寺を訪ねたんですが、その時改めて思ったんですけれども、特に京都とか奈良にある観光寺院には、観光客や参拝者がいっぱい来るんですが、お坊さんの姿を見かけたことが全然ないんですね。当然お坊さんが訪ねてきた人達に声を掛ける場面に出くわしたこともありませんが、よく考えてみたらお寺なのにお坊さんの姿を見かけない、これもちよつと、おかしい話だなと。つまり日本のお寺、特に大きなお寺は、決して閉ざされてはいないどころか、かなりおおっぴらに開かれていると思うんです。にも関わらず、お坊さんが、そういう在家の人達と接点を持つとうとしない。そこが私は問題点だなと思うんです。私は、坊さんになる前に、営業の仕事などもしておりましたので、いわゆる飛び込み営業なんていうのもやったことがあるんですが、別に世間一般でやるところの営業活動をお坊さんもすべきだとは言いませんが、ただ、お寺にお客様のほうから飛び込んで来てくださるといふのは、営業経験者としては非常にありがたい話なんです。こういうチャ

ンスをなんで皆さん活かそうとしないのか、私はつくづく疑問に思っております。一つは、檀家制度というものが余りにもかっちりすぎていて、なんだかんだ言って結局、その檀家制度を離れては、お寺も、そのお寺に住んでいるお坊さんやその家族の生活も成り立たなくなっているものだから、お坊さんがその檀家以外の、全く見ず知らずの人、特に観光客みたいな相手に対して、声を掛けるということが億劫になっているのかなと思われませんが、ただ、その檀家制度も今ははっきり言って形骸化しつつありますね。たまたま生まれた家がこのお寺の檀家だから、という人も少なくないと思います。やはりそういう現状を打破して、これは非常に皆さんの反発を招くかも知れませんが、経済的な維持という点から言っても、私は、一種の営業的なこともやっていく必要があるんじゃないかと、今は感じています。そしてそれを如何に布教教化に結びつけていくかが、今後、実際面での課題になってゆくと感じています。

司会 話をどう進めましょうか……(笑)。

河崎上人のところは、とてもお檀家が少ないお寺さんで、伺いましたらうちのお寺は何年かお葬式が無い、などと仰っていたんですけども、今の、大西上人のお話を受けてどうですか？

河崎 以前に大西さんと、お話している時に、実際にお坊さんが生きていくには、葬式や法事、あとは墓地の管理費、そういうもので実際に、生活をさせていただいていっているというような話を、お聞きしまして、私はちょっとちがうのではないかなと思っております。あえて極端な言い方をしますが、寺や僧侶が、葬式や法事、墓地の管理費に多くの収入源としている現状が伝統仏教の社会で受け入れられており、社会で必要とされない僧侶、寺というもののありようではないかと思うのです。今主任さんが仰ったように、うちの寺では、何年葬式出てないかな、と違って、現在帳を振り返ってみますと、平成十二年から無いんですね(笑)。大変なことでございます。それが何故かこうやって生きていかるのかと申しますと、社会に必要とされる寺・僧侶・寺院として機能をはたしている為ではないかと思う

のです。まさに、お祖師様から、お陰様をいただいております。何とか食べていける状況でありますけれども、要は社会に、人々に必要とされる活動（布教）であり、その為の日常の精進努力だと考えます。

大西　あまり坊さんが食っていくかないと（笑）

司会　ですからね、布教を実践されていることだと思っておりますけれども、具体的に布教教化をどういう風にされているのか、ということについて、お話し頂けないでしょうか？　先ほど、自分の寺を開いているという話をされましたけれども、或いは、大西上人の言い方でいくと、営業されているということになるのか、多分そうではないと思うんですけれども、具体的にはどうされているのか、ということですね。私の住職寺なども檀家寺でございますので、葬儀が五年も七年もないような状況ですと、なかなか成り立たないと思いますし、どうなってしまうのだろうと不安になりますけれども、それでもお寺が維持出来ているというのは、具体的にどういう布教活動をされているのか、ということ、伺えればと思うんですが……。

河崎　取えて、どうやって維持出来るのかというのは、そこに布教活動というものがあって、その布教活動の源、原動力は、まさに社会性であります。私自身がそう思います。僅かな檀家であれども、地域の檀信徒、県、内外からも、あんな田舎の輪島まで、お参りに来ていただけます。殆どが相談事です。当にビハーラ活動です。様々な事項に少しずつ人と人との輪を広げてネットワークを造り上げていく。そこから地域の方々の関わりを持っていく。そして信行会というのが非常に大きな役目を果たしていると実感しております。信行会は、月三回、夜七時から行っておりますが、十分か十五分ほど話して、一緒にお経を読み、一つ一つ積み重ねていくこと、継続をしていくこと、を心がけております。継続は力なり、とよく母親から言われたんですが、続けていくことが、大きな力になっていくなということを実感しております。日常生活の中で社会の人々は、寺や僧侶、寺院にそういう癒しの場、安らぎの場、というものを、非常に求めているというのが伝わってまいります。それに応えていくのが、我々ではないかなと思います。

私はなかなか恥ずかしくてこういうことは言えないんですけども、やっぱり僧侶である以上、私達の背中、信者さんなり檀家さんを説得できるような、僧侶にならないとだめだと思います。僧侶の自己の研鑽は非常に大切だと思うのです。社会に対して社会にしっかりと目を向け、根を下ろし、社会の様々な問題に対して、仏教の法華経の日蓮大聖人の御教えを布教活動していくその地道な活動こそが源であると思うのです。

司会 河崎上人は、地道な、日常的な活動、及び、言葉は悪いかもかもしれませんが、檀信徒の方お一人お一人の「小さな幸福」の積み重ねみたいなものの延長上に、世直しなり、立正安国なりを見ていらっしやるのだと思います。が、そういう観点、或いは方法については、宮台先生はいかがお考えですか？

河崎 それ聞きたかったんです。(笑) 正直なところ、言つてください。

宮台 河崎さんが敢えてソクラテスのように問うてらっしやるような気がするのですが、役割的に申し上げますけれども、人々が癒しが得たい、ただ生きてるだけではないことがしたいという思いがそれなりにあり、それに応えることが宗教者の役割だと思うんです。先ほど申し上げたように、それはいわば社会を補完する役割で、統治権力からもそう見えるわけですけれども、いわばそれに怠落をしようとして、その宗教のもう一つの役割であるところの、その社会を超えるという部分が消えてしまう可能性があることを懸念をします。我々は勿論分別する存在ですが、実は分別は全て方便では有り得ても、世界、或いは全体そのものにはあり得ないわけですよ。僕が昔から親しくしている藤原和博が校長をしている和田中学校では、ホームレスの人を招き話をさせる、その実践には僕も関わりましたけども、分別する存在だから子供達は、ホームレスというと落伍者で汚くて、何かこう人間失格的な存在だと思ってるわけですけども、実際にそういうホームレスは殆どおらず、ホームレスの中には知的で物事の考えや感じ方において深い存在もいっぱいいるんだ、ということを目の前で話を聞いて納得することによって、分別の線が引き直されるわけです。或いは、以前試みたことですが、性風俗で働いているという弱者で、それこそ人身売買のよう

に売り飛ばされて、というイメージがあるとすると、勿論そういうものがないわけではありませんけども、その性の売買の現場にいるのは、実際こういう人間達ですよ、ということを左翼的な観念に凝り固まっている人達の前に出すと、自分が聞いて読んで思っているものとは違った現実を見せられて、勿論一部の人は困惑をするわけですが、一部の人は自分の認識は間違っていたな、分別の線に固執をしていただけなんだな、実はいろんなことがあるんだな、ということが分かってくる。宗教が社会に対して開かれるということの一つの目印は、社会的な分別、通念の分別に凝り固まって固くなってしまっている人間達の凝りをほぐすというか、そう見る気持ちは分かるけど、そう見ていたら社会は、世界は見えないよ、と示唆をするような役割を果たすことだと思っんです。だから自分が、或いは自分達が弱者救済の活動に勤しんでいるんだとしても、その活動の途上でいろんな出会いや目から鱗的な発見があって、その結果当然自分の活動に対する疑念が生まれたとすれば、その疑念は大変に良いものだ。これがほんとに弱者かとか、自分達がやっている振る舞いが本当の弱者救済なのかどうかについての疑念が出てくることは大変いいことで、むしろそうした疑念に突き当たるためにこそ活動しているんだと言っている、というやり方で、絶えず、たかが方便に過ぎない分別から人々を開放する。ただしそれは分別をしなくていいわけではなくて、新たな分別にコミットするだけにしか過ぎないわけですけども、そうしたある種の軽さ、自在さと言ってもいいし、変幻ぶりというか、そうしたものを示唆していくことが、開かれるということのもう一つの側面ではないかなと。最もラディカルな場合には、自分、或いは自分達ができるだけ長生きをして平穩無事に生き延びるということ、果たしてこれはどういう観点から肯定できるのかと考えながら日々生きていくような立場に連れていくということ。いやそんなことをすると心の平安を脅かされるような人間にとっての心の平安はまだ平安ではない、ナイフから身を守らないと平安でいることができないうようなステージの低い境地と思ってもらえるように。守らないと生きていけない平安はたいした平安ではない、と私自身も思いますので、そういうところまで最終的には開かれていけばいいのかな、という気が致します。

司会 大西上人、どうですか、今のお話については？

大西 今、その河崎上人と宮台先生のお話を伺って、結局は人と人との信頼関係を、如何に築いていくかということだと思います。檀家制度云々ということもそうですが、先ほど河崎上人が背中でもって語るべき、というようなことを仰いましたが、またまた卑近な例で恐縮ですが、よく世の中のいわゆる坊さんに対する批判を聞いていますと、坊さんがゴルフをしたら、ベンツに乗ってとかいうのが多いですね。それこそ京都でしたら祇園で石投げたら坊主に当たるとかですね、私も、以前そういうことを、面白半分で言ったりもしていましたが、でも、最近になって考えが変わってきました、別に坊さんがゴルフをしてもベンツに乗っても祇園に行ってもええやないか、と思うようになってきて。問題は、むしろそれ以前の問題ですね。つまりその人は坊さんとして、或いは宗教者として何をやっておるか、ということだと思えます。それを、ちゃんと世に認められる、まあこの世に認められるということのもまた議論になるかと思うんですけれども、そういう坊さん、或いは宗教者としての役割をきちっと果たした上でゴルフでありベンツであり祇園であるならば、それはそれで個人の趣味の領域ですから、それで批判されるということもないと思うんですね。ただ、今お二方のお話を聞いていて、というより、ずっと思っていることなんです、やはり宗教者、特に仏教者というのはどこかで、孤高の人と言いますか、敢えて孤立していることが重要じゃないか、使い古された言葉で言うと、まあこの中には若い頃にそういうことをよく仰った方もいらつしやるかも知れませんが、「連帯を求めて孤立を恐れず」ですか、敢えてそういう姿勢も、お坊さんの自覚としては必要じゃないかと思えますね。だからそれが、地域と、具体的にまた密接に関わりつつ、決して染まらない、埋没しないという姿勢に繋がっていく、この埋没しない、決して閉鎖的ではないんだけど、むしろ積極的に関わってゆくべきなんだけども、埋没しないということをしっかりと把握した上で、修行なり布教なりに臨まないと、結局は、従来の葬式仏教とかのお寺やお坊さんに対する批判を、またぞろ招くことになってしまふんじゃないか、そんな風に考えておりますが、その宗教者とし

て敢えて孤立の道を選ぶという考え方は、宮台先生、如何でしょう。

宮台 僕は大西さんと同じように、ロマン主義的な感受性が強いと自覚をしているので、そういう宗教者には憧れますよね。ローマ教皇庁がよく破門する、中南米における救済の神学を布教する神父さん達も、河崎さんの仰ったように、普段は癒しを求める人間に癒しを与え、日々いいことを一つはしたい人間にそれをするチャンスを与え、社会や体制を単に補完しているように見えながら、実は背後でマフィアのような存在とコンタクトして、資金と武器を貯めて、いざとなったらローマ教皇の破門、その社会の中の打ち首覚悟で蜂起するような存在というのは、ある種の軽口だと思って聞いていただきたいんですけど、僕の小さい頃からの、ある種のロマン主義的なイメージには合致をするところがあります。人々の日々の要求に応じて、平安や善行の機会を与えるということは大変大事ですが、それは宗教者にとっては安全圏に身を置くことにもなります。今日の冒頭からお話をしている世直しの振る舞いは、宗教者ご自身が宗門から破門されることや、社会の中で生きていけなくなることを意味するかも知れないわけですが、宗教者であるが故に敢えてそれにコミットするとか、それを異端審問官として罰しながらも、心の中ではエールを送るような在り方はあつていいというか、僕は心の中ではそういう存在があつて欲しいなと思います。

大西 極端なことを言いますと、私達の宗祖であります日蓮大聖人ですね、鎌倉時代、当時仏教と言えば念仏か禅が当たり前だった時代に、それをもう真つ向から否定して、否定してというのは、それでは救われたいということだと思うんですが、念仏や禅では所詮人々は救われたい、当時全く人口に膾炙していなかった法華経による救いを説いて、その結果、様々な迫害とか弾圧を受けたわけですが、その甲斐あつてと申しますか、今これだけ、お題目というものが日本の、日本だけでなくて世界の人口に膾炙して、まあ、良い悪いは別として、創価学会のような一大勢力も出てきた。それはそれとしてあるわけですけど、では今、日蓮聖人のような方が出てきた場合、私達はその人の言うことを受け入れられるだろうか、或いはその人の存在を、むしろ、日蓮聖人が鎌倉で辻説法をした時に、石つぶてを

投げた人達の側に、私達も回ってしまうんじゃないだろうか。そんなことを私、ずっと思ってるんですけども、で先ほど私が孤立云々というのは、実はそういう思いがずっとあったからなんです。しかしやはり宗教者である以上、そういう立場になることを恐れてはいけないんじゃないかと思うんですね。ただそれが現代社会との間に、どのような摩擦を生み出すかということを考えると、私もやはり、こういうことはあんまり大きい声では言えないというのが正直なところなんです。

司会 今回のテーマは「宗教者と社会との関わり」ということですが、宮台先生のお話の中で、一般社会を乗り越えるような高次の価値観を持つていい、或いは、一般社会とは別の価値観を持つていいということ、或いは、宗教者は、極端に言えば、社会的なニーズに応えなくてもいい、というようなところまでの発言をされているように聞こえるのですけれども、そういう風に聞いてしまった私は、ちょっと聞き過ぎでしょうか？

宮台 いや(笑)、答えから言えば聞き過ぎではないんです。ただ、何事も二元論的な紋切り型には収まらないことが重要で、例えば、衆生と僧侶、という区別も疑わなければいけないし、宗教的ステージという分別も疑わなければいけない、何が救済で何が救済でないか、或いは誰が弱者で誰が弱者でないか、何が平安で何が平安ではないのかも、全て疑わなければいけないんです。しかし、どのように疑おうが、或いはどのようにそれを懷疑しようが、我々は行動しないと生きていけないし、生きていくこと自体が一つの行動ですから、実際には必ず分別の上に乗っかってしまっているということがあるんです。ですから、現代思想の世界では、デリダという人が今から三、四十年前に出てきて、有名になったのは二十年くらい前からですが、脱・構築、デコンストラクションという言葉を人口に膾炙させましたが、それはその二項図式を否定しろということではなくて、二項図式を絶えず乗り越えつつ実践する。言葉の上でどんなに否定しようが、実践するというのはもう絶えず実践しているんです。自分が実践していることを絶えず疑って、線を引き直す振る舞いのことを言っているんだと解釈をします。その彼の影響を受けた思想家というのは、

ハイデガーの思想やニーチェの影響を受けていることと同じことを意味するんですが、二項図式、分別に従うということは、超越神に依存するのと同じような意味で、全く依存的な振る舞いなんだ。エクリチュールというのは超越神の産物である以上、エクリチュール、書かれたものということなんですが、書かれたものを鵜呑みにするような態度は良くない、超越神を疑え、或いは超越神に依存するな、という初期ギリシャ哲学の本懐に徹するのであるならば二項図式を使わないと機能しない書かれたものについても、全てこれを真に受けなくて前に進まなければいけないので、その都度、方便として真に受けたフリとか、受け入れたフリをして進むしかないということの中に、実は疑いという振る舞いさえ入るんだと思うんです。なんかすごい難しいことを言っているようなんですけども全然そうではなくて、要は、善行にしろ修行にしろ、或いは深い思考をする振る舞いにしろ、それは単なる言い訳、エクスキューズになっていないか、或いは、その保身のための道具になっていないだろうかと考えることが重要です。誰もがそんなんですが、保身的でない人間はいないし、自分を守らないで生きていける人間もないわけですが、やっぱり欺瞞は欺瞞なんです。公を語りながら、たかだか私腹を肥やしたり、自分の平安を保つことにもつばら役立つしかない、という事柄がたくさんある。保身がいけないわけではないけど、やっぱり欺瞞はいけないわけです。しかし、欺瞞はいけないんだけど欺瞞から我々は完全に逃れられない、と本日繰り返し申し上げていることなんですが、そういう分別を巡るダイナミズムを絶えず励起していくことがあれば、道徳の肯定もまた方便、道徳の否定もまた方便、人々の要求に応えることも、応えないこともどちらもまた方便とやっていくんではないでしょうか。

河崎 一つ宜しいですか。先生にうかがいたのですが、今のお話の中で、私達は行動というものを通して、実動をしています。実働していかなくてはいけないと思っただけですが、大西上人仰ったように、接点とは、誰と接点をもっていくのか。それは社会の、地域の、人々との接点をもっていく上で、不可能性とか、逆説とかという取らえ方をするならば、人と人との関わりの中で、私達が陥ってはならない、注意点は、保身のための道具になっていないか、

欺瞞になっていないか、というような視点が、私達は、注意をしていかななくてはならないと、先生は述べられたのかなどお聞きしていたのですが、どうでしょうか。

宮台 はい、今、河崎さんの仰った通りです。特に社会科学、社会学の領域から申し上げられることは、例えば、行動すると行動しない、実践と非実践という二項図式に我々は囚われがちなんですけれども、法実務の世界では不作為という概念がありまして、不作為もまた作為、つまり何かを見逃すこともまた見逃すという行為なんです。或いは、知らないこと故に免罪される罪もあれば、知らないことによって免罪されない罪というものもあります、その場合には、そういうことを知らなくてもいい、と自分を甘やかしたり放置したり、知ろうとしない不作為が責められる構造があったりするんです。まとめて言いますと、我々は生きています以上何もしなくても食べてますから、食べている以上何かのシステムに依存しているわけで、システムは必ず何かを排除し、何かを包摂しながら動いていますので免罪されません。何もしないことも含めて、実は行動になっているんです。従って、非行動と行動があるという発想は、僕達の業界から言えば、ある種間違った二項図式にあるんです。そうではなくて、行動しなくていいのではなくて、自分が行動していないつもりで、何をしているか分かっていない、お前はそれをし続けることに、忸怩たるものは感じないのか、という問いかけが、私達の業界的には推奨される部分なんです。我々は生き物であって、とりわけ社会生活を営んでいる以上、生きながら何もしないというような、無為ということは実は有り得ず、無為もまた有為そのものであるわけなんです。そのことにやっぱ気がつかないことは、ある種、鈍感さの罪だと言えるでしょう。この鈍感さが何故罪かと言えば、鈍感であることによって、たまたまそこに生きている、己を保身することにしか貢献しないからです。

司会 河崎上人、今のお答えで如何ですか？いや、頷いてないで（笑）。頷くだけじゃパネルになりませんから（笑）。河崎 成る程なあと思つて（笑）。

宮台 ちなみにヒントとて言いますと、昨年、『インコンピニエントトゥールズ』（『不都合な真実』）という、アル・ゴアが主人公のドキュメンタリーが流行りましたが、同じ時期に、『ダーウィンズナイトメア』（『ダーウィンの悪夢』）という映画も一部で公開されました。ドキュメンタリーとしては、後者のほうが遥かにクオリティーが高いです。ゴアの場合には、環境に優しい振る舞いと優しくない振る舞いで、優しい振る舞いをバックアップしようとしている自分達と、それを妨害しようとしている企業達、みたいな分かりやすい分別なんですけど、『ダーウィンの悪夢』は、そうした我々の分別自体がもはや成り立たない世界にこの社会は入っていることを生々しく描くわけです。詳しい話はしませんけども、ダーウィンの進化論の、元々のフィールドの一つになっているタンザニア湖周辺が舞台なんですけれども、簡単に言えばこのドキュメンタリーに出てくる人間は、世界食料計画の人間にしる、ユネスコの人間にしる、そのタンザニア湖の周辺でナイルパーチと呼ばれる魚を獲って食肉として加工して、ヨーロッパや日本へ、日本でスズキとして売られているものはナイルパーチだったりするんですけども、それは全て世のため人のため、産業を興すためであったり、近代化のための外貨を導入するためであったり、自分の家が豊かになるためであったり、国連職員でいえば、金を単におち込むだけじゃなく、ノウハウも移植して、そこに回る近代的なシステムを作ることであったりと、全てのプレイヤーが善意で振る舞っているんですけども、その結果、ナイトメア（悪夢）がどんどん進行していくんです。今日は時間がないので詳しい話はしません。僕のウェブサイトに一部書いてありますけれども、万人が良かれと思って自分の出来る最善の選択をすることによって、いわゆる合成の誤謬と僕等の業界では言いますけども、悪夢を増殖させていくシステムがますます早い回転速度で回ることを支援してしまう、ということになっていくわけです。こういうドキュメンタリーを見ると、先ほど道徳的感情は俗情の一種に過ぎないという話を申しましたけれども、こういうケースは、俗情を超えていいことをやろうとしても、それですら悪いことしか招かない構造がある、ということが具体的に描かれています。俗情を超えろという二項対立を出しましたけども、これですら現実に截然と

適応できるものではないんです。だから、逆に言えば、我々にとつての指針になり得るんだと思うんです。

司会 今のお話は、「正しさの不可能性」ということや、或いは、去年の十一月に現宗研で講演していただいた時に話されていた、沖繩での実例を挙げられての、善意または善意のネットワークが却って不幸な結果をもたらすことがあり得るというお話に繋がっていくものなのだと思います。

ところで、宮台先生は、エリート主義者でいらっしやって、エリートと一般大衆を区分して、エリートの果たすべき役割というようなことを強く仰っているようにお見受けします。

『ダーウィンの悪夢』的な「分別自体がもはや成り立たない世界」というようなものというのは、ひよっとしたら、誰でも分かるという話でもないのかも知れませんが、みんなに知らせればいい、という話でも恐らくないでしょう。そして、実際に、人々が注目をし、世間受けがより良く、喝采を博したのは、分かりやすい『不都合な真実』の方だった、というようなことがありますよね。

では、こうした「人を見て法を説け」という文脈で、『ダーウィンの悪夢』的な正しさというものを、或いは「正しさの不可能性という正しさ」のようなものを、我々はどこまで踏まえた上で、それをどう主張していったら良いのか。正しさ、我々が考えている正しさというもの、我々の言葉で言えば「立正安国」という言葉になるのですけれども、その正しさについて、我々は、往々にして、誰かれ区別なく、全ての人に等しく、というような主張の仕方では伝えようとしがちなかと思うのですが、そういう伝え方をすればいいということには多分ならないのだからとも思いますが、その辺について、どうお考えなのか。或いは、もっと別の言い方をすれば、今日、お話ししていただいたこと全てがそれに繋がるのですけれども、宮台先生が期待する、宗教者の有り様というものはどういうものなのか、或いはその、期待される宗教者の有り様というものと、宮台先生が考えていらっしやるエリートなる存在との関係性というようなことについてお話しさせていただいて、残り時間が少なくなってきましたので、一つのまとめにしていた

だけばと思います。

宮台 分かりました。エリート主義ルネッサンスを諮ろうと呼び掛けていることは事実です。それがいろんな誤解を招き寄せることを勿論承知しているし、むしろその誤解が招き寄せられて、論争が起こることを狙っているところがあります。誠に重要なことですからけれども、人々の行動の意欲やエネルギーは、場合によってはある種の単純さの中から生まれてくる場合もあるので、『ダーウィンの悪夢』よりも『不都合な真実』のほうが、人々を今までの行動とは違う行動に促しやすいくことはあると思うんです。その意味で言えば、マイケル・ムーアというドキュメンタリストがアメリカにいまして、『華氏911』以降非常に政治性の高いドキュメンタリーを作り続けている彼の行動をどう評価するのかについても、そこで分かれているんです。単純過ぎやしないかという議論と、いや単純であるが故に人々を今までの振る舞いから違うところに向け直す力があるので、緊急避難的にはこれで良いのだ、という議論があります。僕は映画批評家でもあるので、この問題は大変重要な問題として、最近も「マル激」というインターネットのトーク番組で取り上げたところです。これまた単純な二項対立は難しいと思うんです。僕はその時、森竜也さんというドキュメンタリー作家も呼んでお話をしたんですが、絶えず二重底、ないし二枚腰三枚腰である必要があるんじゃないかという気がするんです。むしろ見かけの単純さはあつてよくて、それによって人々を行動に促すことは重要なんだけど、見かけの単純さ、見かけの分かりやすい二項対立の中で、例えば悪とされた存在、取り除かれるべきだとされた存在が、実は向こう側にいるんじゃないかと、こちら側、つまり自分がそうじゃないかと暗喩する構造を持たないと、ドキュメンタリーとしての資格は無いだろう思うんです。その意味で言えば、『ダーウィンの悪夢』と『不都合な真実』が両方ともこの世の中に存在するわけです。両方とも存在することによって、バランス良く機能しているんだと思うんです。別の言い方をすると、『不都合な真実』があるから、『ダーウィンの悪夢』という表現があり得るんだと思うんです。人々がその単純さを信じる方向性がないんだったら、わざわざ『ダーウィンの悪夢』は作られる必要

性がないわけです。例えば、捨て石という言葉がありますけど、単体で意味を持つのかどうかよりも、全体性の中でどういう機能を果たすのかを参照することも、特に全体性に目を配るべき宗教者には重要なことだと思います。僕が今こういう形で宗教者に期待している中身として述べていることが、実はエリートという存在に期待していることの中身と殆ど同じになります。僕はよく典型的な逆説として言うんですけども、単純な左翼のナショナリズム批判というのがあります。これは単純過ぎることは簡単に証明できるんですが、今のエリート主義との兼ね合いで言えば、日本が八方丸く収まって、少なくとも短長期的にはうまくいくということによって、回りにある様々な矛盾を覆い隠す可能性があるにも関わらず、この日本社会や人類社会全体を平穩無事で持続可能なものにしなすと思うことは、いいことなのか悪いことなのかどうか。一概に言えないけれども、少なくとも社会を設計して、こうすれば社会は回ると主張しているエリートは、日本社会とか人類社会にコミットメントしてますよね。簡単に言えば、執着しているわけです。この執着ということを欠いては、人間が生きることすら肯定することができないわけです。実際、ドイツにそういう社会運動団体がありますが、人類絶滅を目標とする社会運動団体です。何故ならば、地球がガイアとして、地球という全体性としてうまくいくためには、人類という害虫を真っ先に抹殺することこそが、数多のものの救済に繋がるという、内容的には必ずしも否定できない、場合によっては正しいことを言っている団体があるわけです。しかし、これは我々としては、やはり受入可能ではない。それは何故受入可能ではないかということ、我々にとっては生きるということが前提だからです。自分が生きる、これからも生き続けられるだろうということ、いつか死ぬにしても、そのことを前提にしない思考は、基本的にはあり得ないわけでは無いんですが、その社会的なコミュニケーションとしては意味を持たないわけです。そう考えると、ヒューマニズムも非常にある種エゴイズム、ナショナリズムもある種のエゴイズム、誹りは免れることはできないけど、だからと言ってこれを二項図式的に否定すると、我々の生存の条件すら肯定できなくなってしまうということに堪える存在は、やっぱりエリートと呼びたい、

と申しますと、これは先ほどから申し上げている、宗教者に期待されている、ある種の二重底や二枚腰と同じものだとお分かりいただけるんじゃないかと思います。

司会 残り時間が少なくなってしまうので、河崎上人、今の宮台先生のお話を受けて、行動する青年僧侶としての決意を述べていただいて、まとめにしていただけだと思います。

河崎 やはり、社会で行動していく、敢えてそこに執着し、私達青年僧は、しっかりと地に足を着けた、行動をしていきたいと思っております。そこには社会性というものをしっかりと見据えた上で、内なるものへの目線だけではなくて、外に向けても、もっともっと、学ぶべき姿勢をしっかりと整えて、自分自身を研鑽し、先生が仰るような、広い視野で、今後、布教活動ができるような、態勢を作っていくこと。それから、私自身の生き方として、やはり平和活動は、これからの宗教者には大切だと思うのです。むしろ社会には、宗教者にその平和活動をそして指針を求めていると強く感じてならないのです。宗教者として平和活動をどう行うかのか、仏陀が、お釈迦様が殺すなかれと言われたその絶対平和というもの、如何なる戦争も許してはいけないということ、それをやはり、社会に訴え続けていく使命をおおびているのが、私達、僧侶であり、仏教者であり宗教者であり、青年僧であろうと、いう風に思います。そして、私は、被爆者との関わりから平和に対する願い強くなりました。被爆者の、あの願い、あの思い、社会に対しての訴えを、私達宗教者が、寄り添って、共に、行動をしていくということも、大きな、役目ではないかなと思います。

司会 そろそろ、時間がまいったようで御座います。どこまで議論が噛み合ったのか、司会者自身がよく分かっているというふうな状況でございますので、皆様方におかれましても、或いは、それに近い思いをお持ちであるというようなことがあるかも分かりませんが、もし議論が噛み合っておりませんようでしたら、それは司会の不手際で御座います。皆様がお土産をお持ち帰りいただけるような思いを持っていただけているのだとすれば、それは三名のパネ

リストの方の御法功であろうと存じます。

お三人とも大変にお疲れさまでございました、ありがとうございます。これをもちまして、パネルディスカッションを終了させていただきます。(拍手)